

国際京都学だより

第8号 二〇〇八年（平成二十年）四月一日（火）

編集：国際京都学協会事務局

〒604-8383 京都市中京区西ノ京小堀町二五三
ホームページ <http://www.kyotogaku.org/>
Eメール info@kyotogaku.org

発行：国際京都学協会

題字は書家・杭追柏樹（くいせこはくじゆ）氏

おもてなし再考

日置 弘一郎

現在、京都大学経営管理専門職大学院では、文部科学省が募集したサービスイノベーション人材育成プロジェクトに応募し、全国で六大学が選定され、現在その事業が進行中である。サービスといっても選定された大学でのプロジェクトのテーマを見ると、文科省のねらいは通常考えられる対人サービスを指しているものではなく、サービスというものは、

今の産業の状況は、ものを売ることが次第に難しくなっている。ものがあふれているというだけではなく、消費者は自分が何をほしいのかを知らないために、それを教えてもらわなければならない状態にある。個人消費者だけではない、企業も自分にとつてもっとも望ましいものが何であるかを教えてもらうことがビジネスとして成立している。

もつとも典型的なのがIBMである。通常IBMはコンピュータを製造する会社と思われているが、現在のIBMは売り上げの七割がコンサルテーションである。かつては大型コンピュータを主要製品とし、パソコンに進出するといったハードウェア中心の製品構成であったが、今や、どのようにコンピュータを使いこなすかについてのコンサルテーションが売り上げの中心である。

IBMだけではなく、センサー製造のキーンエスは営業利益率が五割近いというところで知られている高収益企業であるが、センサーを組み合わせて工場の生産システムを設計するという情報を付加して販売している。このような状態を「ソリューション」と呼んでいる。ソリューションビジネスを円滑に進めるには、顧客の要請を適切に読み取る必要がある。この読み取り能力が重要な要因となり、この部分を担当する人材の育成を図ろうとするのが文科省プロジェクトの目的で

あるようだ。

ところが、このような顧客の要求を理解する能力は対人サービスについても共通する。そこで女将研究を行っている筆者にお声がかかった。プロジェクトではこのような能力を訓練するカリキュラムや教材の開発が予定されており、相手の要請を理解する能力を研究している。ところが、その能力が「おもてなし」と共通の構造を持っているらしいことがわかってきた。言語化されない潜在的な欲求までも引き出すことが必要で、その能力が共通する。このプロジェクトでの成果をもとに国際京都学協会との連携も考えられる。

（京都大学大学院経済研究科教授）

第8回 国際京都学体系研究会

「能と『源氏物語』」

小川佳世子

『源氏物語』を素材とするいわゆる「源氏物」とよばれる能は現在九曲が知られる。《葵上》《浮舟》《野宮》《玉鬘》《夕顔》《落葉》《須磨源氏》《半蔀》《住吉詣》である。現在上演される能が二〇〇曲以上あることを思うと『平家物語』などによる曲の多さに比べても、意外に少ないように思われる。しかし《葵上》《野宮》《半蔀》など上演回数も多く名曲とされる曲が含まれていることが特色といえるのではないだろうか。

また「源氏物」ではないが世阿弥作の《松風》《忠度》《敦盛》は『源氏物語』『須磨の巻』による須磨のイメージが重要な要素となっている、など『源氏物語』は

能にとつて大変重要な存在なのである。世阿弥による能の大成期にはすでに四〇〇年前に誕生した古典であった『源氏物語』を能の作者たちは、さまざまな方法で受入れ現在に残る人気曲にした。そこには『源氏大鏡』『源氏小鏡』などの中世の梗概書の存在、「源氏寄合」など連歌書の利用など中世の『源氏物語』受容の実態をかいまみることができ、能と『源氏物語』について考えることは『源氏物語』の古典としての受容の歴史を考えることに通じるのである。紫式部の霊を供養する「源氏供養」を素材とする曲『源氏供養』からも、室町時代当時の『源氏物語』受容について知ることができ、

今回とりあげた『野宮』は「賢木の巻」を主な素材と六条御息所の霊を主人公とする『源氏物語』の後日談ともいえる夢幻能である。その詞章をくわしく検討すると『源氏物語』の美しい「ことば」を引用し、また連歌の寄合語などを用い、文飾を凝らしつつ、秋の嵯峨野の寂寥感を表現する夢幻能の独自の世界を作っていることがわかる。

世阿弥は「能を作るものは歌道をたしなめ」と言ったが藤原俊成は「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」と言った。能と『源氏物語』それぞれが和歌と深い関係を持っているのである。能は先行する文芸である和歌や『源氏物語』の美しい「ことば」を今に伝える中継点ともなっている。と同時に古典をふまえて新しい能独自の世界を作っている。「源氏物」は『源氏物語』の舞台化というわけではないのである。

『源氏物語』千年紀にあたって、二〇〇八年は「源氏物」の上演の機会も多い。また他の曲であっても『源氏物語』のさまざまな影響を感じることができ、能をとおして『源氏物語』を思い、その美しい「ことば」を味わい、また、能独自の世界を楽しむことができ、よいと思う。『源氏物語』の主な舞台は京都であり、能にも京都を舞台とする曲が多い。能と『源氏物語』の関係を考えることは京都について振り返ることも通じる。そして能が中継した『源氏物語』の世界は、これからまたどうつながって行くのだろうか。興味は尽きない。

(京都造形芸術大学講師・歌人)

第5回 国際京都学体系研究会 「町家の喜怒哀楽」 山中恵美子(京・町家文化館副館長)

江戸後期、文政年間に創業した老舗の食用油専門店である山中油店は国の「景観重要建造物」や「登録文化財」に指定されている。今回の研究会はお店の向かいにある「京・町家文化館」を訪ね、副館長の山中恵美子さんに町家の今昔についてお話をうかがった。スライド写真を使って説明していただいた内容を編集部でまとめてみた。

町家にはきまった定義はなく、伝統的な軸組構造の一戸建てで、間取りが店(見世)、玄関、台所、奥と続き間となっており、それに平行して通り庭があり、さらに奥庭を保っているものを呼ぶそうだ。外観の特徴には、紅殻格子、虫籠窓、大戸などがあげられる。

いま見る町家の原型が江戸時代の中ごろまでに来たことは、百以上もあるさまざまな『洛中洛外図』の絵からわかる。十六世紀なかごろの『上杉本』で京都の様子をみると今とはずいぶんちがっている。石置き板張りの屋根で間口は二、三間で、ほとんど平屋であった。

江戸時代になると瓦が普及し始め、17世紀始め頃の『洛中洛外図』をみると以前と雰囲気が変わってくる。二階の部分ができて屋根の一部が瓦になっている。重い本瓦で醤油屋、酒屋、味噌屋など豪商の家のようにだ。三階建ての蔵や屋根の上に櫓をつくっている。

豪華な住まいに対し幕府の禁令も出された。『清和院町文書』のひとつ『町儀定覚帳』には「家作事仕り候々……上下むかふを見合、町並能様仕へく候事」などと、町並を考慮し身分相応のものを作るよう定められたようすが知れる。

元禄から享保年間に京・大阪や江戸で起こった災害や事件を記した『月堂見聞集』によれば、一七三〇年の「西陣焼け」が起こった後に「西陣類焼之町家、瓦葺に可致由被仰出候、当分成がたき者は、下地瓦葺の心得を致し、負つて瓦葺に可との事」とあり、瓦にするように下地をするようとお触れが出ている。

その後、一七八八年の天明の大火など京都には何度か大火が出ている。最後に大きかったのが一八六四年の蛤御門の変にもなう火事で、街の中心が焼けてしまった。その後で再建された家が多く、鉾町などの立派な町家のほとんどは明治以後の建物だが、江戸時代の形を踏襲しているのが、がらつと変わったわけではない。山中油店の場合は、火が堀川で止まったので江戸時代の建物が残っているそう。

町家が環境に優しい古な家だという説明もあった。玄閑庭、走り庭など総称して通り庭のため、紅殻格子から奥まで風の通り道ができて、夏でも過しやすくクーラーの必要がない。靴脱ぎ石の段差の下の部分も空洞になっており風の通り道が何本もできる。ただ、近年は台所の改装やトイレの水洗化などで通り庭が改造されている。夏は涼しいが冬の生活はほんとうに寒いので着込んだり工夫している。

今回の演題の「町家の喜怒哀楽」については、つぎのように語っておられた。

「まず喜ばしいことは、仕事の間としてあれ、職住一体のかたちであれ、人が住んでいるということは、町家が喜んでいることでしょう。つい怒りをおぼえるのは、町家ブームでカフェやレストランに改造したりしているが、廊下や二階に靴のまま上がったりにしているのを見るときです。そんなとき、これでは町家が怒っている面も多々あるのではないかとかんじます。哀しいのは、町家が日に日になくなっていること、十年前の調査では二万八千軒あったが、七年後には一三パーセントがなくなっていたという。このところ少し歯止めがかかっています。京町家づくりファンドという京都市の取り組みがあります。東京の篤志家の寄付が契機になったが、平成一八年度で七件のモデル事業が実施されました。

この事業は、歴史的意匠建造物(京都市)、登録有形文化財(文化庁)、歴史的景観重要建造物などに相当しないような、ちいさな町家の改修などに資金を出すものです。氷山の一角かもしれないが、すこしずつ手当てをしようということでしょう。「楽」というのは、楽しいということもあるが、身体が楽であるということ、紙と土とわらといった自然の素材でできたつくりものである町家は身体に優しいつくりなのではないでしょうか。リサイクル可能なつくりで、環境に優しいエコの家である。季節を取り込んでいく生活、何とか工夫をして過こしやすくしようとすることが町家の暮らしになります。」

そのほか、正月の飾りの準備、今宮さんのお祭り、お精霊さん迎え、月参り、地藏盆など、歳時記にまつわる町家の暮らしについて興味深いお話をうかがうことができた。盛りだくさんのお話であったので、「ここは要約しきれなかった。くわしくは山中さんの『よそさんは京都のこと』を勘違いしたはる』『二〇〇三年』や『杏の木』のひとり言、油商家に生まれて』『二〇〇〇年』などの著作に触れてください。山中油店の近くには「京・町家文化館」や町家ショップ&カフェ「綾綺殿」などもあるの、一度足を運んでみればいかがでしょうか。

(編集部)

第4回国際京都学体系研究会

「京都学基礎論(定義と枠組み)」古川 修(地域史研究家)

国際京都学の多彩な活動の基礎になるには、その中心概念である「京都学」についての共通認識の形成が必要という提言で、要約すると以下のような内容であった。

まず用語の定義からはじめ、「京都学」とは「京都」を研究対象とする学問で、研究主体は住民・非住民を問わない。「京都」とは京都盆地(「周辺」を含む)の自然、住民、住民が創造し伝承してきたモノ及び情報の三要素の総体。周辺とは「住民」が生活の拠点を置く京都盆地を取り囲む地域で、具体的に山科・宇治・長岡京、嵯峨、城陽、鞍馬、八瀬大原、八幡、大山崎など。

京都学の史資料を分類するため、天明八年の大火など住民の生活に大きな影響を与えた出来事を区切りとして九つの時代区分を設定した。史資料の種類は個別の史実の裏付けとなる一次史資料と、その応用・研究により得られた二次史資料に区分した。上記の分類に従い集積した史資料は七五〇〇点ほどになり、当日の発表では、パワーポイントを駆使して膨大な分類表が示された。最後に歴史は個々の人間の活動が作り上げるものであり、個人を重視して住民名称の採録をするべきだが、作業量の膨大さを考えれば協会全体の共同作業とするのが望ましいと提言されていた。

(編集部)

事務局だより

経過報告 二〇〇三年十一月の発足以来、下記の事業を重ねてきました(敬称略)

●〈研究会〉

- 第1回 「京の川と歴史について」森谷尅久
「私と鴨川とのかかわり」(シンポジウム)今本博健、嘉田由紀子、田中真澄
(二〇〇四・九・二五)
- 第2回 「京の川と生きもの」基調講演「水環境と生きものたち」石田紀郎
「鴨川の生きものたち」(シンポジウム)久米直明・牧野達也・須川恒
(二〇〇四・一一・二三)
- 第3回 「京の川と庭園―小川治兵衛と美の世界」小川治兵衛(二〇〇五・四・九)
- 第4回 「京の川と芸能」笠谷和比古(二〇〇五・九・一七)
- 第5回 「京の川と音景観」小松政史(二〇〇六・九・二八)

●〈体系研究会〉

- 第1回 「国際京都学とはなにか」米山俊直(二〇〇五・一〇・一五)
- 第2回 「世界に京都を発信する―その内容と方法」中村順一(二〇〇五・一一・二〇)
- 第3回 「桓武天皇と渡来人―平安京の国際的環境」井上満郎(二〇〇七・一・八)
- 第4回 「賀茂祭今昔」臈谷寿
「京都学基礎論の試み(定義と枠組み)」古川修(二〇〇七・五・一一)
- 第5回 「町家の喜怒哀楽」山中恵美子(二〇〇七・六・二三)
- 第6回 「祇園祭の魅力―山鉾の国際性を中心に」島田崇志
「住民の京都学」杉田繁治(二〇〇七・七・二三)
- 第7回 「文化・芸術のまち京都からの発信―平成風流踊ルネッサンス
大学と地域との交流・連携の促進」富士谷あつ子(二〇〇七・一一・一)
- 第8回 「能と『源氏物語』」小川佳世子(二〇〇七・一二・二三)
- 第9回 「今年催される源氏物語 千年紀事業のご紹介」西邑昭裕
『源氏物語』の舞台」杉田博明(二〇〇八・三・六)

●〈見学体験会〉

- 第1回 富田屋「西陣町家のくらし」田中峰子
- 第2回 柗家「観光に見る京のもてなし」西村明美・日置弘一郎
- 第3回 吉田山荘「吉田山荘と京古ブランド」中村京古・日置弘一郎
- 第4回 車折神社、嵐山舟遊び 第5回 平野神社と夜桜見物
- 第6回 月桂冠大倉記念館見学会

●〈交流サロン〉は(富田屋)及び(懇親交流会)(弥生会館)で計十五回を重ねている。また、

記念シンポジウム基調講演「京都とツーリズム」高田宏(二〇〇三・一一・三三)
公開講演会「平安京と東アジア」上田正昭(二〇〇四・五・一五)
講演会「京町家ぐらし・女の精神力」田中峰子・西村明美(二〇〇七・六・二)
などやタウン・ミーティング(6回)も開催してきた。

その他、京造形芸術大学と共催の「都市景観の保全と再生研究会」を3回実施した。

●「ニューズレター」国際京都学協会だより」の主な記事は下記のとおりです。

創刊号「ご挨拶」米山俊直、「国際京都学協会の会報創刊おめでとうございます」榊本頼兼、「京の川」森谷尅久、「京都文化の国際的環境」井上満郎

第2号「京の隅から」芳賀徹、「京の川と歴史について」森谷尅久、「鴨川はあぶない」今本博健、「命をはぐくむ水を大切に」田中真澄、「鴨川、セーヌ川、ブルタバ川」嘉田由紀子、「清流の流れる町京都」森谷尅久、「西陣町家ぐらし体験会に参加して」

第3号「海を越えて学ぶ京都」富士谷あつ子、「水環境と生きものたち」石田紀郎、「溪流的要素と都市河川の要素」久米直明、「オオサンショウウオを気軽にウオッシュングしよう」牧野達也、「キャンパスは鴨川、テキストは水鳥・人・環境」須川恒

第4号「小京都の簇生」森谷尅久、「西川と近き川」相馬大、「様ざまな月」臈谷寿、「忘れたことば」細長う「山下要三、「京都の暮らし」田中峰子

第5号「追悼号 米山俊直先生を偲ぶ会」「あいさつ」芳賀徹、「米山俊直さんと私」上田正昭、「日本文明の基礎にある京文化―国際京都学協会のねらうもの」米山俊直

第6号「二十一世紀の京都―日本の中の位置付け」中村順一、「京都とベトナム」香川孝三、「京都を良くする異文化の目」杉田繁治、「京の川と音景観」について」武部宏、「都市景観の保全と再生研究会(樋口忠彦)」

第7号「源氏物語千年紀」臈谷寿、「祇園祭の魅力―山鉾の国際性を中心に」島田崇志、「住民の京都学」杉田繁治、「ロチ・ハーン・米山さん」赤阪賢

●原稿の募集

これまで「国際京都学だより」は上記の事業の記録などを中心に編集してきました。今後この方針に変更はありませんが、さらに会員の皆様がたの原稿を記載したいとかがえております。「京都への想い」やそれぞれの「国際京都学」論、会の運営をめぐる提案、さらに近況報告・随想などご寄稿をお待ちしております。400字詰原稿用紙一枚から一枚半程度(約四百―六百字)の範囲で編集部(FAX:075-812-3555 E-X-1ル info@kyotogaku.org)宛に送付願います。